

沼津市若山牧水記念館

第19号 1997.10.1

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL(0559)62-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 FAX(0559)62-0424

若山牧水の雅号について



若山牧水が文学に関心を持ったのは延岡中学時代で、周囲の教師や友人達の影響を受けて、校友会雑誌、文学雑誌、新聞等に雑文や短歌などの作品を発表する。当初は若山繁の本名で発表していたが、中学二年(明治三十三年十六歳)頃から『紅葉』、『秋空』の雅号を用いるようになる。そして、前号で紹介した「行き暮れて尋ねぬものを時鳥悲しき初音今ぞ聞くなる」が、「中學文壇」の明治三十四年八月号に「桂露」の名で発表される。「中學文壇」は東京の北上屋書店が発行した投稿誌で、

同年十月に「秀才文壇」が、さらには「帝國少年議會議事録」(後に「青年議會」と改題)と名は厳めしいが青少年の投稿雑誌も出て、牧水はそれらの雑誌に次々と投稿するのである。他に牧水の短歌や小説の類が発表されたものを挙げる。と、「中學世界」「青年文學」「青年界」「文庫」「國文學」「中央公論」「新聲」「野虹」「曙」「萬朝報」「宮崎新報」「日州獨立新聞」等がある。散文か短歌かで、或いは投稿先により「桂露」「雨山」「白雨(白雨楼)」「白羽」「野百合」など幾つかの雅号を使い分けていたようである。

当記念館の展示から拾うと、明治三十六年二月の「青年議會」に「二日夜きざみし御像なかなばなりて欄に倚る朝菊の香たかき」が「白雨」の名で出されており、同年六月の「中學世界」には「野の靄に百合の香みつる曙を少女が祈る恋美くしき」が「野百合」の雅号で発表されている。

上掲の写真は、明治三十六年六月十五日友人の伊東雨花の上京に際しての記念写真。後列左端が牧水、その隣が後に平賀春郊として牧水と行を共にする鈴木春江(財蔵)、そして猪狩白梅(毅)、前列左が伊東雨花(金蔵)、右が堀井治策の諸氏。牧水十九歳、多感な文学青年の気宇が表情から窺えよう。

「牧水」を名乗ったのは明治三十六年十一月の「中學世界」冬期増刊号への投稿からで、以後すべて牧水の名で発表されることになる。牧水の「牧」は母の名「まき」からであり、「水」は生家の前の清流坪谷川への想いからだという。

母まきは、牧水に大きな影響を与えた三人の女性の一人(他の二人は、初恋の人園田小夜子と妻となる太田喜志子)と言われ、牧水の自然への憧憬を育んだ人として大きな存在であった。牧水の生涯に亘る水源希求の想いを考えると、この「牧水」の雅号はたいへん象徴的であり、十九歳にして牧水の名乗った時、彼は苦難に満ちたしかし豊饒な生涯への軌道に乗ったとも言えようか。(須永 秀生)

「伽羅の歌」と「KYARA」シリーズ

定兼 恵子



道路工事で使うような手押し車にシャンデリアが載っている、そしてそれが燦然ときらめいている。

これが最近見た最も美しい美術作品（シユテファン・フーバー作）で、直接目にしたのではなく、美術雑誌のグラビア写真の片隅に発見した。たった二、三日前の出来事だったが、写真の中ではたかだか二センチ四方のこの作品が、私に少なからぬ衝撃を与えた。何の変哲もないむしろみすばらしいとも言うべき手押し車に載せられた、華麗なシャンデリアは

大きすぎて、そのクリスタルガラスの飾りが車の外側にはみ出て、しどけなくと言っている具合に垂れ下がっている。このように、日常のしばしば退屈な空気をうち破るようにして、ある種のショックを提供してくれるのが芸術だと思ふのだが。

私が母と昨年の秋初めて沼津市の若山牧水記念館を訪ねた際、展示ケースの目立たない端っこに、ふと「伽羅の歌」を見いだした時思わず小さな声で叫んでしまった。（笑は決して小さくはなかったらしく、この声に、びっくりした事務局長の柴田さんが慌てて出ていらしたが、すぐにこの方独特の笑顔で優しく喜びを分かち合せて下さった。こういう普通は見すごされるかも知れない美しい刺戟を刺戟として感受できるなら、結構良い人生が送れるのではないか、と思っている。）

私が勝手にそうよんでいる「伽羅の歌」というのはこうだ。

たきすてし伽羅のけむりのたなびきて

あるじはあらぬ春雨の窓

あの時、私はもしかしたらこの歌を日本人としてはなく、まずヨーロッパ人の感性でとらえたのかも知れない。（何しろもう二十六年もドイツに住んでいる。）香は無論平安の王朝時代を想い起こさせるものだけれど、「伽羅」という言葉のエキゾチックな響きと、それから連想されるむせ返るような濃い

匂いの中に、おそらく私は西洋の歴史のつくり上げた重厚な美しさを感じとったのだ。例えばポツティエリの「春」や、バッハの「マリアの讃歌」や、コクトーの「恐るべき子供達」などに通じる美を。そして牧水の中に突然胸のすくような国際性を見た。（芸術は芸術である限り、当然国際性も普遍性も備わっているに決まっているのだけれど……）牧水の作品は、日本のかそけき美をうたっていて、そこには尚かつ世界に通用する広やかさがあつたのだ。そして官能的でもあるこの歌を、牧水は十五歳で作った。（大体が芸術家は早熟でモーツァルトは六歳でメヌエットを作曲している。）

この歌に何故それほどひきつけられたのかと聞かれれば、すべての道具立てにとらえどころのない曖昧さが漂っていて、それが私の胸をふるわせたからだ。ほとんどすべての要素が目に見えない。匂いも、けむりも、あるじも、甘やかな雨もすべて汪洋として目にも耳にも鼻にもまるで頼りない。第六感でとらえるより方法の無い一種昇華された美の雰囲気、若い牧水が歌という形で表現しえた、ということではないだろうか。このような「浄化」とも言うべき状況を現出させるのが、文学や音楽や美術だと思っている。人がもどかしく胸の内に抱いたままに思っている。芸術家は言葉や音や形にして解き明かす。歌の中の窓のある家が豪華な邸宅だとは思

わない。むしろごみごみした小路に面した粗末なした屋。そこからかすかだけどもまめかしく漂ってくる香の匂い。これが芸術を芸術たらしめる神秘のパラドックスだ。美は美のみでは美にならない。醜と隣り合っていて、危い均衡を感じとらせるとき、初めて美が予感されるはずだ。ちょうど、前述の道路工事用車押し車がこの貧しい家にきらびやかなシヤンデリアが伽羅のゆかしい匂いにあたる。

さらに、余り陰うつに沈みこんでいくのも上等な芸術とはいえないと思うのだが、牧水のこの歌は、先の美術作品の「さんざめく光」と同じく、生きる喜びのようなものを惜しみなく発信している。各句はすべて「a」のキラキラ輝くような音声をもつ音節で始まっている。三十一文字の内十二文字までが「a」の音である。つまり明朗な気持ちを喚起する「a」が歌全体に散りばめられている。官能の情緒を表現してもそれが哀しく落ちこまず。天に翔び立つていくような上昇感、牧水の若さからきているのだろうか。しかしすべての理屈を超えて、私は牧水のこの「伽羅の歌」を愛する。

私は素材としての鉛筆が気に入っていて（描いていくうちに芯が丸くなって線が太くなったり又濃くなったり、光の加減でハーレーションを起こしたり、まるで生き物のような生々しいエロスがあるから。）よくこれを自身の作品に用いる。思わせぶりの技法や押しつけがましい内容は御免なので、普通の紙の面を鉛筆の線で埋めるだけという単純なものも多く作っている。昨年のデュッセルドルフでの個展にはこの手法をもっと押さえて、つまりほとんど計算の無い鉛筆の線さえも目立たないというものを作ってみたくなった。そして、無心に描いているというよ

り、ただ面を線であらわしている時、突然落雷のように「伽羅の歌」が天から降って来て、私はこうある意味で無目的につくり始めた作品を三枚組みとし、一つ目を「たきすてし伽羅のけむりのたなびきて」、二つ目を「あるじはあらぬ」、そして三つ目を「春雨の窓」と題し、その全体を若山牧水に捧げることに決めた。これは私の意志から離れたところより下った恩寵としか思えない。落雷からこの決定までわずかな数分しかかからなかったはずだ。私は矢も楯もたまたまず、この不思議な事件について、この展覧会を實現化して下さった資生堂ドイチュランド社長の若山三郎さんにお伝えすると心から喜んで下さった。この個展は、資生堂の芸術家支援活動の一つとして計画されたものだが、勿論私は若山さんにゴマをするうとしてこの作品にその題名をつけたのではない。若山三郎さんは偶々牧水の孫であらせられるとしても！

見ようによつては、私の作品の鉛筆の線の連なりや重なりが「けむり」に見える、又やわらかな「雨」にも見える。そして、その時私は初めてのことなのだ、まさに「匂うような」作品をつくってみたいと思ひ牧水に感謝した。

何故私が芸術を生涯の仕事として選んだかというば、予測が不可能で曖昧にも映るのに、神の側からは秩序立ったシステムから成るに違いないこの宇宙を、美術作品の上で現出させてみたいからだ。逆説に満ちてもうろうとしたこの世の有様をシステムティックに明解な形として表現してみたいからだ。私が特に牧水の「伽羅の歌」を愛するのは、私が自らの作品の中に表わそうと望んでいる情況が、この歌の中で美しくくり広げられているからだろう。い



「Kyara」シリーズ3部作と筆者

ずれにしてもこの「伽羅の歌」に出逢えたおかげで、私の個展が充実し（この「若山牧水に捧ぐ」と題した作品を観に来た多くの人々が気に入ってくれた。）更に新しいシリーズ「KYARA」が生まれた。この鉛筆の線だけで広い空間を埋づめてみたい、という野心もついでに生まれた。その空間は「匂い」で充たされるだろうか？

一九九七年二月七日 デュッセルドルフにて

筆者の紹介

定兼恵子（さだかねけいこ）現代アート作家。若山旅人当館館長の三男若山三郎氏の友人。上智大独文、ケルン大、デュッセルドルフ芸術大卒。在ドイツ二十七年。

牧水、啄木の「友情の歌碑」

盛岡市に建立

若山牧水と石川啄木の交流を記念した「友情の歌碑」が、今年五月岩手県盛岡市馬場町にある啄木の母校下橋中学校の正門前に建立された。



牧水、啄木の友情の歌碑

歌碑は、高さ一・八メートル、幅二・六メートルの黒御影石製で、右に牧水の「城あとの古石垣にもたれて聞くともなき瀬の遠音かな」、左に啄木の「教室の窓より通^とじてただ一人かの城址に寝に行きしかな」の盛岡城址にちなんだ短歌が刻まれ、中央に二人の友情を紹介する説明が添えられている。

歌碑の建立は、二人の友情を知る市民有志が、啄木の本名「一」が三つ並ぶ生誕百十一年の「川寿」の記念として計画したものである。牧水歌碑としては二百十基目、啄木の歌碑としても百三十五基目だが、牧水、啄木二人一緒の歌碑はもろろんこれが初めてである。

牧水は、啄木より一歳年上で、早くから啄木の才能を認め、牧水の主宰する文芸雑誌『創作』に啄木の短歌などを掲載しているが、北原白秋らの紹介により知己となり、病苦の啄木を時折見舞っていた。

明治四十五年四月十三日の朝、啄木の妻からの危篤だから来てくれとの知らせに、石川家を訪れた牧水は、そのまま臨終に立ち会うことになった。

牧水は大正元年九月号の『秀才文壇』に啄木の臨終の模様を記しているので、抜粋して引用する。

「夫人は其時枕もとに来て、声を高くして、若山さんがおいでになりましたよ、解りますか、解りますかと訊いた。きけば今朝の三時半から全然昏睡状態で、何ひとつ解らなかつたのださうだ。石川君は、

夫人のさういふのを聞いて、口をもぐぐさせながら、僕の顔を見て、またにつこり笑つた。何か云ふのだつたらうが、云へなかつたのだらう。実にその微笑こそ、石川君の最後の意識であつたのである。うとくと半ば目を瞑つて、既うそれから何を云つても感応が無かつた。次第々に呼吸が遠くなつて、ゴクリ／＼と動く咽喉もとも今は殆ど絶えて来た。いつの間にか、一人の老人が石川君の枕もとに来て手を執つてゐた。老父である。

僕は惶しくお京ちゃん(長女、六歳)を探しに部屋を出た。三四度呼んだが、何処かへ遊びに行つてゐなかつた。あわて、引返すと、老父と夫人とが双方から石川君の上に倒れ臥して、忍びやかに声に出して泣いて居られた。額に触つてみると、全く冷くなつてゐた。老父は濡れた眼で、枕もとの置時計を取上げた、午前九時三十分、——四月十三日のことである。

医者、電報打ち、区役所、警察署、葬儀社などへ独りで駆け廻つてゐると、ほか／＼と照る日光に直射せられて僕は度々眼がくらみかけた。」

なお、牧水は、歌集『死か芸術か』の中に、「石川啄木君死す」として追悼の歌四首を詠んでいるので、紹介する。

初夏の曇りの底に桜咲き居りおとろへはてて君死ににけり

午前九時やや晴れそむるはつ夏のくもれる朝に眼を睨ぢてけり

君が娘は庭のかたへの八重桜散りしを拾ひうつつとも無し

病みそめて今年も春はさくら咲きながめつつ君の死にゆきにけり